

2022 年 1 月 29 日

2021 年度聖路加国際大学大学院
看護学研究科課題研究

遺伝学的検査の結果開示により
未診断患者や親が受ける心理的影響
および医療提供者に求めること：
文献レビュー

Psychological Impact of Disclosing of Genetic Test Results
on Undiagnosed Patients and Parents
and Requests to Healthcare Professionals:
A Narrative Review

20MN009

小野 千尋

要旨

「目的」

本研究は、遺伝学的検査の結果開示により、未診断患者や親が受ける心理的影響および医療提供者に求めることを明らかにすることを目的とした。

「方法」

検索データベースである、医学中央雑誌 WEB 版、PubMed、PycoINFO、The Cochrane Library、CINAHL Plus with Full Text、Embase を使用し、各データベースの収録開始年から 2021 年 8 月 28 日までに収録された論文を網羅的に検索した。対象文献を抽出後に、それぞれハンドサーチを行い、最終の対象文献を選定した。

「結果」

対象文献として 8 件の文献が選定された。すべての対象文献は、英語で記載され、2010 年から 2021 年までに出版されていた。研究デザインは、質的研究が 7 件、量的研究が 1 件であった。研究の実施国は、アイルランド共和国、アメリカ合衆国、カナダ、イギリスで、未診断の成人患者を対象とした文献が 2 件、未診断の子どもとその親を対象とした文献が 2 件、親のみを対象とした文献が 4 件であった。遺伝学的検査の結果開示により未診断患者や親が受ける心理的影響として、受検前の患者からは『診断のための探索の動機』『遺伝学的検査の結果受容のための心の準備』が、親からは『診断のための探索の動機』『遺伝学的検査の結果を待つ準備』というカテゴリが抽出された。結果開示後の患者からは『遺伝学的検査の結果開示や診断を受けたことによる心の揺れ』『欠いた診断名』『血縁者への影響がないことによる安心感』『他の家族のリソースとなっていることへの気づき』『未来の健康と希望の形成』、親からは『遺伝学的検査の結果開示や診断を受けたことによる心の揺れ』『子どもと遺伝学的検査の結果を関連させた表現』『ケアに対する変化』『子どもとの連帯感』『家族としての責任』『人生設計や家族計画のかたち』『ピアグループとつながること』『行為の意味の捉え方』の合計 17 カテゴリが抽出された。医療提供者に求めることとして、親から『未来の発展と希望の形成』『診断に対するサポート体制の充実』『思いやりや配慮を必要とするコミュニケーションや言葉遣い』の合計 3 カテゴリが抽出された。

「結論」

遺伝学的検査を受検してもなお未診断のままだった患者や親の中には、診断を求め、終わりの見えない探索が続いている者がいたが、受検に意味を見出し、自分たちの中に落とし込もうとしていた。本研究の結果、診断名がなくとも、診断困難な健康問題を抱え、助けを必要としていることを認めてもらえるだけで、患者や親の心は軽くなることが明らかとなった。遺伝学的検査の結果開示により未診断患者や親の適応に与える潜在的な心理的影響を理解し、思いやりや配慮を持った対応を心掛けることが求められている。